

堀合先生に学ぶ(11)

立川 多恵子

今回はゆっくりペースの子どもが、園生活で友達とごっこ遊びを楽しむようになったその成長の過程を追ってみたい。

◇ 出会い

入園当初の晴彦は言葉がはっきりしなかったたので園内には自閉症ではないかと心配する人もあった。(保育界では言葉が出なかったり、はっきりしなかったりするとすぐ自閉症ではないかなど、心配する傾向がある。)

私も晴彦に出会ったばかりの時期には、高い声で話す

彼の言葉は理解しにくかった。その上表情も固いので、緊張感の強い子どもではないかと考えた。緊張のあまり言葉がはっきりしなかったのかもしれない。入園当初の彼は保育室で積木を並べたり、ミニカーを動かしたりして遊んでいることが多かったが、他の子が傍に来て触っただけで、「キーキー」と大声を出して騒いだ。

◇ 安定して遊び出す

それでも年少組の半ば頃には、一人で落ちついて遊ぶようになった。堀合先生に「晴ちゃん安定して遊ぶよう

▶ 一人で落ちついて遊ぶ



になりましたね」と話すと、先生は「そういえば、最近
は余り『キーキー』言わなくなったわね」と言われた。
先生は晴彦を特別視していないようである。

先生は個々の子どもが環境と出会って、その子なりの
遊びを展開することを非常に大切にしている。したがっ
てクラスの子どもたちは登園すると自由に遊んでいる
が、お弁当の時間になると、自然にどの子ども保育室に戻
ってくる。そんな時、先生は「晴ちゃん、まだかしら」
と呟く。そして園庭を見回し、下靴に履き替えると、砂
場の方に走り出す。

砂場では晴彦が一人だけ残って遊んでいることもあ
る。先生は「晴ちゃんお弁当よ」と声をかけるが、傍で
遊具をかたづけながら晴彦が遊びを止めるまで気長に待
っている。決して無理に手を引っ張って連れ戻すことは
ない。

入園当初は庭にも出なかった晴彦であるが、最近では砂
場遊びが大好きになって、砂場にいる時間の方が多くな
った。

年少組の時は、「晴ちゃん戻って来たかしら」と言い

ながら、晴彦をホールや園庭に迎えに行く先生の姿を見かける日が多かったが、やがて子どもたちの中に「先生、わたしが晴ちゃんを探してくる」という子が出てきた。一番先に言い出したのはみちるである。彼女は先生の助手役の好きな子どもである。先生は「ありがとう」と言ってみちるに晴彦のお迎えを頼んだ。しかし折角みちるが迎えに行っても、晴彦は「今日はお帰りなし」と叫ぶことが多い。

面白いことにロッカーの中に自分の世界を作って先生のやることや、友達のことを見ていたあかりが、先生の「晴ちゃん戻って来た？」という言葉を図のようにして、晴彦を迎えに行く役割をとるようになる。このことについては七月号でも触れているが、先生は「私がみちるをほめすぎたから、あかりが迎えに行くようになったのではないか」と気にしていた。先生は「ほめられるからやる」といったことが好きでない。子どもの主体性を阻害することを嫌い、子どもが自分で判断して行動に

移せるようにと考えている。

◇ 園生活のリズムがわかる

晴彦の迎えも年中組になると、数人の男の子になり、グループで迎えに行くようになる。それでも晴彦の方は相変わらず、遊び足りないのか「今日はお帰りなし」と叫ぶ。迎えの子どもたちは晴彦が遊びをやめるまで、傍で楽しそうに語らいながら待っている。先生のゆとりが子どもたちにも伝わっているといえよう。

お弁当の時間やお帰りの時間になって、晴彦が自分から遊びを止めて保育室に戻るようになったのは年中組に進級してしばらくしてからである。

晴彦の育ちを見ると、子どもが園の生活リズムを自分のものにするのは結構難しいということがわかる。大人は従来の生活パターンを早急に子どもに押しつけて、自分を安定させたがる傾向が強い。先生はそれをさけて、子どもがその気になるのを待った。一人ひとりの子どもの特性を尊重したいからである。

◇ 必要な時、先生を頼る

晴彦が「先生！」と駆け込んできた。私は何ごとが起こったか見守った。晴彦は「うめ組の子が裸足になって
いるから僕もなる」と早口に訴えた。先生は「そう、い
いわよ」と言いながら、手早く靴と靴下を脱がせて「終
わったら先生に声をかけてね」と伝えた。

晴彦は大きく頷いて再び砂場に戻って行った。

私はその時「晴ちゃんが積極的に先生を頼るようにな
った」と感じた。長い間先生は晴彦を迎えに行くばかりでなく、子どもたちが呼びに行ってくれるようになって、後からくる晴彦のために先生の傍に椅子を用意して待っていた。先生のクラスは降園のためのお集まりの席も子どもが選択している。

晴彦が保育室に戻ってくると、靴下を取り替えたり、上履きを履かせたり、いたれりつくせりである。傍で見ている私はもう年中組なんだから、自分でやらしたらどうかと、批判的になったこともあった。しかし先生は焦らず、押しつけず晴彦の世話を黙々と続けた。過保護に



裸足で砂場

見えるこうした世話が先生に対する晴彦の信頼感を徐々に育てたといえる。

先生は一人ひとりの子どもが自立するまでどんな援助も惜しまない。それが子どもとの信頼関係を育てる原点と考えるからである。

◇ 友達と遊ぶ楽しさを知る

「うめ組の子が裸足になっている」と訴えて、先生に裸足にして貰うと、晴彦は砂場に戻って自分の作った池の中に足を入れてパチャパチャやり出した。そのリズムは傍で晴彦と同じように池でパチャパチャやっている子のものでそっくりである。晴彦が他の子のリズムに合わせて楽しめるようになったと感心して見ていたら、今度は晴彦の方がリズムを変えた。それに友達が合わせる。

相手に合わせてパチャパチャと楽しんでいるうちに、晴彦の方からリズムが生まれ、そのリズムが相手を刺激して楽しさを倍加する。相手に即して動くばかりでなく、自分で作ったリズムを相手に伝える。お互いの提案

が遊びを楽しくしている。みごとにコミュニケーションである。

その日は砂場の隅に深い池が掘られていた。その中に子どもたちが入ってビチャビチャしながら楽しんでいた。晴彦が突然「ねえ、僕も入れて」と言った。子どもたちの一人が「一人ずつだよ」と応える。晴彦は即座に「じゃあ、次やらせてね」と頼む。

遊びの満足が次の場面で相手の立場を考えて待つというゆとりある態度を生み出す。この間まで自分の主張が通らないと、ひっくり返って「キーキー」言って暴れていた晴彦なのに、と思うとこの一年間の晴彦の変化に驚く。

◇ ごっこを楽しむ

しばらくして、再び幼稚園を訪れた私は、友達とごっこを楽しんでいる晴彦の姿に出会うことが出来た。晴彦はその日、朝からスーパーマリオのお面を作っていた。お面ができると早速先生のところに行つて帯をつけて貰

って、しょう太とマリオごっこを楽しむ。年少組の時の晴彦はお面作りには殆ど関心がなかった。たまに「やり出したな」と思っ見て見ていると、黒一色でグジャグジャに描いて、その辺に放り出して置くので、先生が拾って置いて後でお面にしてやるといった状態だった。

今日、晴彦が作ったお面はカラフルだった。お面に帯をつけて貰うと、早速それをかぶって遊び出す。晴彦たちのマリオごっこは園庭に出ても続いた。彼等は園庭でも走りまわり、格闘する。しばらくして晴彦はそのお面を自分の棚の中に入ようと再び園庭に戻ってきて、カラフルな器をいくつも籠に入れて山のすべり台の上に並べる。そしてその中から三つを選んで山の下に持って行き、砂を集めて器に入れる。それを注意深く抱えて再びすべり台の上に運ぶ。そして再び空の器を手にして山の下に運び、砂をつめる。

こうした活動を晴彦が根気よく繰り返し続けていると、雄一郎がやってきて「入れて」と言った。晴彦は「いいよ」と応える。そして早速「トロピカルジュース

▶ 土管の冷蔵庫



にする？ パインジュースにする？」と訊ねる。晴彦は何度も山を上がったたり、降りたりしてジュース作りをしていたのである。

晴彦の「トロピカル？ パイン？」という問いに対して、雄一郎は「ぼくもジュース作りたい」という。晴彦は少し困った顔をしたが、黙って器を抱えると山の下に降りて行った。その後を雄一郎も同じように器を抱えて降りて行く。二人はそれぞれの場所で器に砂を入れる。ジュースは次々に作られ、すぐ二十個位になった。その時、何を思いついたのか晴彦が「そうだ、いいこと考えた」と言った。私はこれから何が始まるか興味を持った。

ジュースの器が次々に山の下の洞穴に並べられる。晴彦が雄一郎に「冷蔵庫だよ」と言った。雄一郎と共通のイメージを持ちたかったのである。雄一郎は黙々とジュースの器を洞穴に運ぶ。

晴彦は次々に増えるジュースの保存場所を考えて、山の下で土管で作られた洞穴を冷蔵庫に見立てたのだ。晴

彦は雄一郎の「ぼくもジュース作りたい」と言う言葉を受けとめた結果、二人でジュース作りをすることになり、ジュースが沢山できて、しまって置く場所を考える必要を感じたのだろう。

友達とのごっこ遊びは面白い。相手のイメージによって、自分のイメージを変える必要が起こる。その結果トランプの起こることもあるが、ごっこに新しい変化や進展が起こる。このようなきっかけがグループでのごっこ遊びを一層楽しくする。

入園当初、他の子が傍に寄ってきただけで悲鳴を上げていた晴彦も、その子なりの育ちを大切にして、援助する堀合先生との生活の中で、今日も友達とのごっこ遊びに没頭して楽しむ。

(十文字学園女子短期大学)